

SIMULATIONISM

シミユレーションニズム

中ザフビデキ

相互補完的にネオ・エクスプレッショニズムとほぼ同時期（70年代後半から80年代）に発生したシミユレーションアートは、ハイパーリアルな現代社会の流通構造を明確にヴァイジヨニ化した。方法論的には過去の美術作品を借用/盗用するアプロプリエイション、オリジナル/創作という概念を脱構築したサンプリング、幾何学的抽象形態を用いるネオジオなどが挙げられる。シミユレーションは美術の発生からすでに内在していた問題であり、シミユレーションアートは独自の方法論によってその問題を顕在化させたといえるだろう。

先日門前仲町くんだりまで出向き、ああマネの中に私がいる、ゴッホの中に私がいる、レンブラントの中に私がいる、ソウ、私ハ王女、A&Bとすつかり森村泰昌ランドに無条件降伏した私ですが、数日後友人が私に持ってきてくれたウイデオはフジテレビの番組からダウンロードした「キツチユの朝までナメてれば」で、それ以来私は毎日のようにこのウイデオを眺め暮しているわけです。一応御説明致しますと、キツチユ改め松尾貴史なる人物（肩書きはモノマネ芸人）がテレ朝の「朝まで生テレビ」なる大討論番組をたつたひとりで、まるごとサンプリングしてしまつたのがコレとして、ひとつの画面の中でキツチユ扮する田原総一朗、キツチユ扮する大島渚、キツチユ扮する舛添要一、等々総勢二十名程のキツチユが大言をはりあげて紛糾致しております。スゴイ！コレはすでに森村泰昌を思えてしまつていないゾナイカ？と固唾を飲みながら毎日ウイデオ鑑賞しているのですが、ウイデオを見ながら私が考えたのは「シミユレーションニズム時代に美術する二つの方法」なるタイトルです。以下に御説明致します。

まず、ネオ・エクスプレッショニズムに始まり、ネオジオの台頭によって明らかになつたこのシミユレーションニズムの時代にあつては、とうの昔に真正の意味での美術は死滅しており、シミユレーションアートの課題はいかに美術するかにてなくいかに美術を奪うかにてあるという大命題を確立しておきます。つまり、はじめから反芸術ては非芸術はいかに（擬似）美術すればよいのか？私には二、三の方法があると思います。ひとつは、美術を相手にするのではなく、美術史を相手にすること。美術史をいじくる美術史オタクになつてしまふという方法です。もちろん美術史をなくとも美術の制度でも評論でもかまいません。そして森村ランドはこの一例です。もうひとつの方法は、もはや完全に美術と縁を切つてしまふこと。かつて大阪芸大生だったキツチユはいまや花形タレントです。芸術家を標榜するより芸能人を名乗る方がより今日的であるはずで、ただし、ここで注意しておかなければならないのは前項の美術史オタクが存在してはじめてこのような言説が可能になるということであり、森村ランドの存在なくしてはキツチユはたんなるモノマネ芸

人、その番組はたんなるパロディにすぎません。しかしながらさらに注意しなればならぬところは、キツチユにとつてはそれよりもよいのではないかとということです。実際にモノマネ芸人以上のどんな言説が彼に必要だといつてしまふ？物事に「芸術」という言葉を冠しようとする時から又ての誤謬が始まるのです。

さて、擬似美術する第三の方法は、端的に言つてしまえば「一番目の方法+二番目の方法」です。非芸術を美術の文脈に置いてみる。といつても他器を美術館に置くのはすでにとても芸術的ですよ。ここにおける真正の非芸術とは、芸能のようなもので、中ザフビ○氏は「近代美術史オタク」の中でそれを「世俗のシアワセ」と呼んでます。そして「世俗のシアワセ」代表選手としてシエフ・クーンズを一筆をさき、これを「目にした途端、アナタの心にはまるでバナナラムの音浪を聴いているかのようなシアワセが広がることでしょう」と解説し、作品の力ロイヤに対する言及なしにクーンズ論はあり得ないとしています。そう言へば、美術史オタクに入れてしまつた森村の王女A、王女Bもあんなにアイクルシクツタはね！

むしろ複製版までもを手書きで書いてしまつた中ザフビ○氏の近代美術史オタクの方がより純粋な意味での「美術史オタク」なのかもしれない……

さて、森村ランドでもクーンズワールドでも言えることですが、一番顕著にわかりやすい形でキツチユウイデオに現われているのがハイパーリアルな話です。これは本当に正直な話なのですが、キツチユの扮する大島渚の方が本物の大島渚よりよっぽど大島渚ほかつたりします。何もキツチユに限ったことではないのかもしれないが、モノマネ芸人の方が本物より本物らしいと感じたことはアナタにもあるでしょう。その意味で、本物はすでにオリジナルでなく、本物自体もオリジナルの複製なのです。この謂がいわゆるポストリヤールの言うところのハイパーリアルな話で、すなわちシミユレ

ーションニズムの話なのですが、何が言いたいのかというと「オリジナル神話の崩壊」の話です。よく言われることですが、近代とは未復讐を追い求める時代でした。近代においては個人が確立し自我はオリジナルを生産したのです。オリジナルは絶対の条件でした。ところがすべてのものが再生産され複製されるようになったシミユレーションニズムの時代にあつては、前述のようにオリジナルすら複製産物アール。そしてすべては既視感感トナル。オリジナルを生産する自我は無くなり、自分は他人の複製アール、他人は自分の複製アール。最終的に私が言いたいことは「自我の崩壊」の話です。具体例を挙げるとシミユレーションアートの中でもとくにアプロプリエイション・アートと呼ばれるマイク・ピトロの仕事などはまさしくこれに相当し、ポロック、ピ

カソ、マン・レイと次々に脚筋を続ける彼の仕事から、ではポロックを、ピカソを、マン・レイを取上げたら、何が残るのかという、何手残ナナイ……マイク・ピトロなる人物はどこにもいないわけです。同時にまったく逆の言い方もあり、ポロックはピトロであり、ピカソもピトロ、マン・レイもピトロです。自我の崩壊ということは他者の崩壊でもあるわけです。

ということは「マネの中に彼がいる、ゴッホの中に彼がいる、アはやつたりタメて、森村作品の正しい鑑賞の仕方はやはり「マネの中に私カイルゴッホの中に私カイル」なのでしよう。キツチユのウイデオに至つては、私は私に笑いかけ、私は私に糾弾され、私は私の言うことなんてなんにも聞いていなくつたりします。

さて、いよいよ著作権の話に移

りましょう。最終的にシミユレーションニズムは、近代の法体系までもくつがえすものであつてほしいのよ、二〇・九世紀の真真正正に不気味に輝く地球に登場してわれわれが盗難をまめかされる唯一の手段は盗犯にまわることタノ、イヤダスカミナサン、これは正当防衛なのでヨノ、自分ハ他ヒナアル、他人ハ自分アル。著作権をブツツセ。いまに、赤瀬川原平のことき人物がふたたび現われ、法庭に立つこととしよう。その日にぞ、われわれのリアルが賦されるべき時なのです。その日のために、われわれは今から準備をしむこう、X-RAYは必ず来るのです。

(おそろむらさき・エクスプレッサー)



上より
森村泰昌 美術史の娘 王女A 1989
クーンズ ソナベント画廊の広告
ピトロ これはピカソではない、1983
「朝までナメてれば」の キツチユ=大島渚